

現代中国語の再帰表現における 自然受身文への適性に関する一考察 ——「身体部位 N + VP」形式を中心に——

日下部 直美

0. はじめに

日下部 2009、2010 では、現代中国語における「V + 身体部位 N」形式の再帰表現¹を用いた受身文の一つである“被”構文について取り上げ、再帰表現の他動性の高低、及びその意味的特徴との関連について分析を行った。日下部 2009 では、“被”構文である「身体部位 N + 被 + N_a + VP」（N_aは動作主）と主題文である「身体部位 N + N_a + VP」の形式を取り上げ、両者の成立の可否について分析を行った。また、日下部 2010 においては、再帰表現における他動性の高低が高いものほど“被”構文への適性が高いことを明らかにし、更に、その適性についても、統語的成分や意味的側面、及び人称やシチュエーションも影響していることを指摘した。

本稿は日下部 2009、2010 と同様に、所謂受身文の一つである「自然受身文」を取り上げ、再帰表現の他動性の高低が、その意味的特徴に基づいて如何なる統語的制約を有しているのかという観点に立脚して分析を行うものである。以下、「V + 身体部位 N」形式の再帰表現を用いた自然受身文である「身体部位 N + VP」の形式を取り上げ、当該構文の成立の可否について分析する。その上で、当該構文の成立が「再帰」という意味的特徴に関連していることを、「視点」、「客体化」という観点に基づき、明らかにする。

1. 再帰表現と他動性の高低

現代中国語における再帰表現の他動性の高低について、日下部 2008a :122 では以下の 3 つのパラメータを設定した。

- (i) 動作主の意志性 (VOLITIONALITY)
- (ii) 対象物は変化を被る
- (iii) 対象物の被影響度 (AFFECTEDNESS OF O)

(i)、(iii) は Hopper and Thompson 1980、(ii) はヤコブセン 1988 の基準を導入したものである。日下部 2008a では、これらの特徴が多く備わっているものは他動性が高く、少ないものは他動性が低いとした上で、再帰表現を他動性の高いもの (A)、高いものと低いものの中に位置するもの (B)、他動性が最も低いもの (C) の 3 つのグループに分類した。

- (A) 剪指甲 [爪を切る]、刮胡子 [髭を剃る]、拔牙 [歯を抜く]、
切断手指 [指を切る]
- (B) 梳头发 [髪をすく]、洗手 [手を洗う]、刷牙 [歯を磨く]
- (C) 招手 [手を振る、手招きする]、抱胳膊 [腕組みをする]
眨眼 (睛) [瞬きする]、伸腿 [足を伸ばす]、点头 [頷く]、
歪嘴 (巴) [口をゆがめる]

本稿は、上に挙げた (A) ～ (C) 類の再帰表現の他動性の高低が、身体部位 N が主語の位置に立つ自然受身文である「身体部位 N + VP」構文の成立の可否と関連しているという観点に基づき、分析を行う。²

2. 自然受身文について

自然受身文は「意味上の受身文」とも称され、「N_p + VP」(N_pは被動作主)の形式をとり、“被”、“让”、“叫”などの受身のマーカーを用いた形式をとらない文のことである。龚千炎 1980:339 によると、この場合の N_p は動作(行為)の影響を被る受け手であるとともに話題或いは主題であるということである。即ち、N_p を話題とした上で、その状況や様態を説明しているといえる。これに従い、本稿の表現例では、N_p を話題や主題とした日本語訳を付けてある。

次節から、N_p が身体部位 N である「身体部位 N + VP」形式に焦点を当て、再帰表現におけるその適性をみていく。

3. 「身体部位 N + VP」における容認度

本節では、1 節で挙げた (A) ～ (C) 類の再帰表現を用いた「身体部位 N + VP」形式において、その適性についてみていく。以下に挙げる表現例は、全てネイティブに、身体部位 N が動作主自身のものであると想定した上で、動作主が“我”と“他”の両方である場合について、「非文(*) / かなり不自然(??) / やや不自然(?) / 自然(無印)」のいずれであるかのチェックを受けたものである。

3.1 (A) 類の行為

まず、(A) 類の行為についてみる。

(3-1) {指甲 / 我的指甲 / 他的指甲} 剪了。³

[{爪 / 私の爪 / 彼の爪} は切った]

(3-2) {胡子 / 我的胡子 / 他的胡子} 刮了。

[{髭 / 私の髭 / 彼の髭} は剃った]

(3-1)、(3-2) は身体部位 N がノーマークの場合であれ、また、“我” や “他” といったようにマークされている場合のいずれであっても、自然な文として成立する。両者の動作（行為）によって、身体部位が動作主自身から「分離」し、身体部位が動作主自身とは別個のモノとなっていることから、これらは他動性が高い行為である。そのため、身体部位を客体化して捉えやすいと考えられる。次の (3-1)’ のような表現例がその一つである。

(3-1)’ (数人で爪を順番に切っていて)

你的指甲剪了吗？——— 我的指甲剪了。

[あなたの爪は切ったの？——— 私の爪は切ったよ]

しかしながら、以下の (3-3)、(3-4) は、動作主が自分自身の身体部位に対して行う動作（行為）として想定した場合、いずれもかなり不自然になるという。

(3-3) {?? 牙 /?? 我的牙 /?? 他的牙} 拔了。

(3-4) {?? 手指 /?? 我的手指 /?? 他的手指} 切断了。

これについて、(3-3)’ のような対話を挙げて考察してみる。

(3-3)’ A: 前几天听你说牙疼, 最近怎么样?

[数日前あなたは歯が痛いって言っていたけど、最近どう?]

B: 拔了, 我的牙拔了。 [抜いたよ、私の歯は抜いたよ]

(3-3)” A: 前几天听你说他牙疼, 最近怎么样?

[数日前彼は歯が痛いんだってあなたは言っていたけど、最近どう?]

B: 拔了, 他的牙拔了。 [抜いたよ、彼の歯は抜いたよ]

この場合の B の“我的牙拔了”は「自分で自分の歯を抜いた」のではなく、「他人が（自分の歯を）抜いた」という意味が優先されるという。もし、「自分で自分の歯を抜いた」ということを表すのであれば、“我的牙被我（自己）拔了”[私の歯は私（自身）によって抜かれた（→ 歯は自分で抜いた）]⁴といったように“被”を用いた表現にした方が適切であるという。歯を自分で抜くことは普段の生活ではあまりなく、実行させるにはかなりのエネルギーが必要となる特殊な状況である。自分で自分自身の歯を抜くことは、意識的にも困難であることから、自分にとって多大な労力と決意を必要とする行為を客観的にみることは極めて難しいといえる。杉村 1998:61 は、「“被”構文は、受け手成分を叙述の起点（即ち主語）としたものであり、“被”構文を用いて、あるコトガラに対して述べる際には、話し手の『叙述のアンクル』と『心理的感情』は、普通は受け手である主語そのものに与えられる」と述べている。即ち、“被”を用いた表現では、所謂主語の位置にある身体部位 N に視点が置かれ、そこから事態を描写することになるため、自分の身体部位を自分で意識することになる。他方、「N_p + VP」の“被”を用いない構文については、吕文华 1987:179 が「通常は気持ちが平静で、感情のニュアンスが無い叙述に用い、事実そのものを叙述することに重きを置いている。受身の意味は割合希薄で、文は一般的に中性的なニュアンスをもつ」と述べており、事態を客観的に述べた叙述文であると指摘している。即ち、当該構文を用いることによって、事態を客観的に捉えていると考えられる。従って、自分で自分自身の歯を抜くといった、自分にとって多大な影響を及ぼす動作（行為）を客観的な事態として捉えることができない。即ち、視点を事態の外側ではなく、自分自身の身体部位である歯に置き、そこから事態を描写せざるを得ないことから、視点の位置が一致しないという矛盾が生じるため、“被”を用いない自然受身文の場合は抵触が生じ、ネイティブにとってかなり不自然に捉えられてしまうと考えられる。また、(3-3)のように、身体部位が“他”のものであっても同様に、彼自身

が抜いたとは想定し難く、他人が抜いたと捉えてしまうが、“被”を用いて“他の牙被他（自己）拔了”[彼の歯は彼（自身）によって抜かれた（→ 彼の歯は彼が自分で抜いた）]という表現にした場合は自然な文として成立する。

また、同様に考えて、(3-4) も自分で自分自身の指を切り落とすといった事態を客観的に捉えることができないため、かなり不自然な文となってしまうが、“工作的时候，不小心手指被我切断了”[仕事中に、不注意で指が私によって切り落とされてしまった（→ …指を切り落としてしまった）]、または“他”の場合は“他₁的手指不小心被他₁切断了”[彼の指は不注意で彼によって切り落とされてしまった（→ …彼は指を切り落としてしまった）]といったように“被”を用いた文にすれば、視点の位置が一致するため、自然な文となる。

最初に挙げた (3-1)、(3-2) が自然な文として成立するのは、両者の「爪を切る」、「髭を剃る」といった動作（行為）が、「歯を抜く」という動作（行為）と比較すると、痛みを伴うといった自分自身にとって多大な影響を及ぼしたりするものではないため、事態を客観的に捉えることができる。即ち、事態の外に視点を置き、そこから客観的に描写することができると考えられる。従って、この自然受身文の構文的機能と合致することから、自然な文として成立すると解釈することができる。⁵

3.2 (B) 類の行為

次に、(B) 類の行為の例を挙げる。

(3-5) {头发 / 我的头发 / 他的头发} 梳了。

[[髪 / 私の髪 / 彼の髪] は梳いた]

(3-6) {手 / 我的手 / 他的手} 洗了。 [[手 / 私の手 / 彼の手] は洗った]

(3-7) {牙 / 我的牙 / 他的牙} 刷了。 [[歯 / 私の歯 / 彼の歯] は磨いた]

(3-5) は (3-1)' と同様のシチュエーションで、以下のようにいうことができる。

(3-5)' A: 你的头发梳了吗? [あなたの髪は梳いたの?]

B: 我的头发梳了。 [私の髪は梳いたよ]

(B) 類の行為は、(A) 類の行為よりも他動性がやや低いが、動作主自身の行為によって身体部位の状態が変化し、それを動作主が認識できる場合である。また、(3-3)、(3-4) とは異なり、身体部位に痛みを伴わず、動作主にとってそれほど影響は与えないと考えられる。即ち、自分にとって多大な影響を及ぼす動作（行為）として捉えないため、客観的に事態を捉えることができる。従って、視点を事態の外に置いて描写する自然受身文の構文機能と抵触が起こらないことにより、自然な文として成立するといえる。

3.3 (C) 類の行為

最後に (C) 類の行為についてみる。

(3-8) { *手 / *我的手 / *他的手 } 招了。

(3-9) { *胳膊 / *我的胳膊 / *他的胳膊 } 抱了。

(3-10) { *眼睛 / *我的眼睛 / *他的眼睛 } 眨了。

(3-11) { *腿 / *我的腿 / *他的腿 } 伸了。

上の (3-8) ～ (3-11) は、身体部位がノーマークの場合、領属先が“我”、“他”のいずれも非文となる。(3-8) ～ (3-11) に用いられている動作（行為）は全て身体部位の空間的位置に変化が生じているのみで、身体部位そのものに対する被影響度が見られないため、動作主は身体部位の変化を客体化して捉えることができない。即ち、事態の外に視点を置いて描写する自然受身文の構文機

能と合致しないことがその原因であると考えられる。(3-8)を例として分析するならば、動作主が自分の身体部位である“手”に働きかけて動作(行為)を行う“我招了手”[私は手を振った、手招きした]というシチュエーションは容易に想定できるが、“*手招了”は、身体部位である“手”が、動作主の働きかけ無しで“招了”という動作(行為)を行ったという事態を描写していることとなり、そのような事態を想定することは容易ではない。従って、その事態の外に視点を置き、客観的に描写するということは困難であるため、自然受身文の構文としては成立できないと思われる。

他方、下の(3-12)の場合は事情が異なる。(3-12)において、身体部位である“頭”がノーマーク、及び領属先が“我”である場合はかなり不自然であるが、領属先が“他”の場合はやや不自然である。

(3-12) {^{??} 头 / ^{??} 我的头 / [?] 他的头} 点了。

(3-12)の領属先が“他”の場合は、以下の(3-12)’のようなシチュエーションを設定すると自然な文となる。

(3-12)’ (会議中に彼が頷いたことを相手に伝えたい)

那时候他的头点了。我看见了。

[あの時、彼の頭は頷いたよ。私は見たよ]

また、“歪嘴”は、いずれの場合も自然な文として成立する。

(3-13) {嘴 / 我的嘴 / 他的嘴} 歪了。

[{口 / 私の口 / 彼の口} がゆがんでしまった]

(3-13) のような表現例は、突然口が曲がる病気にかかってしまい、鏡を見ながら自分の口が曲がってしまったことを述べている場合に用いることができる。即ち、身体部位に視点を置いてそこから描写しているのではなく、「自分の口が曲がってしまった」という事態を、その事態の外側に視点を置いて客観的に描写しているため、自然な文として成立すると推察できる。

4. おわりに

本稿では、「V + 身体部位 N」形式の再帰表現において、所謂自然受身文「身体部位 N + VP」の形式を取り上げ、成立の可否について分析を行った。その結果として、他動性の高い A 類の行為においては、“剪指甲”、“刮胡子”の両者はいずれの場合も自然な文として成立するが、“拔牙”、“切手指”はかなり不自然となった。このことについては、“被”構文との比較により、視点の位置という観点から分析を行った。

B 類では全ての表現はいずれの場合も成立するが、他動性の低い C 類では、“点头”のみが、身体部位の領属先が“他”の場合においてシチュエーションを設定することにより、成立する。しかしながら、この他の“歪嘴”以外の表現は全て不成立またはかなり不自然となった。このことから、用いられる形式によって中国語話者の視点が異なり、この視点の差異が身体部位 N を用いた再帰表現においても反映されていると考えられる。

また、他動性の高低のみならず、「再帰」という行為に対する中国語話者の捉え方も、構文成立に影響していることが窺える。即ち、動作主自身の身体部位に働きかけるという「V + 身体部位 N」形式の再帰表現であっても、どのような動作（行為）が身体部位 N に対して行われたかによって、用いられる構文にも制限が出てくる。このことから、中国語話者が個々の再帰的行為をどう捉えているかによって、差異が生じてくると考えられる。

注

- ¹ 本稿の「再帰」とは、動作主が自分自身に対して行う動作（行為）を指す。仁田 1982：80 はこれを「動作主から出た働きかけが結局は動作主自身に戻ってくることによって、動作が完結するといった現象」と定義しており、本稿でもこの定義に従う。
- ² (A) ～ (C) 類の行為における他動性の高低の詳細な分析については、日下部 2008a を参照のこと。
- ³ 本稿の例文は全て作例であるが、いずれもネイティブチェックを受けている。
- ⁴ 中国語の受身文は、日本語の受身を表す「レル/ラレル」とは必ずしも一次函数的に対応するものではなく、受身文を日本語で表現する際に、「レル/ラレル」や「ニ格/ニヨッテ句」を用いて直訳すると、不自然な日本語になってしまう場合がある。従って、本稿の例文訳は、中国語を直訳したものの直後に、それを自然な日本語にしたものをカッコ内に記してある。
- ⁵ このことは、日下部 2009 で考察した“被”構文と主題文における分析とも一致する。仮に、主題文である“*手指我切断了”がいえるならば、この場合は動作主自身の指と自分自身との関係がかけ離れたものとして感じており、動作主自身の視点が事態の外に置かれ、そこから客観的に描写している場合であるという。しかしながら、“被”構文である“手指被我切断了”は、視点が身体部位である“手指”に置かれ、そこから事態を描写している。即ち、「指を切り落とす」といった動作主自身にとって痛みを伴う動作（行為）については、視点の位置が事態の外に置きにくいことにより、所謂主語である身体部位 N に視点を置いてそこから描写することとなる。従って、“被”構文の機能と合致するため、自然な文として成立すると考えられる。

主要参考文献

- 大河内康憲 1982. 「中国語の受身」『講座日本語学 10 外国語との対照 I』明治書院
- 香坂順一 1959. 「『自然的被動』というもの」『人文研究』第 10 巻 第 11 号 大阪市立大学
- 日下部直美 2008a. 「現代中国語における再帰表現に関する一考察——「V + 身体部位 N」

の形式を中心に」『多元文化』8号 名古屋大学大学院国際言語文化研究科国際多元文化専攻

日下部直美 2008b. 「中国語の再帰表現における他動性と客体化の関連性——「V + 身体部位 N」の形式を中心に」『人文研究論叢』4号 星城大学

日下部直美 2009. 「現代中国語における“被”構文と主題文について——「V + 身体部位 N」形式の再帰表現を中心に」『人文研究論叢』5号 星城大学

日下部直美 2010. 「現代中国語の再帰表現における受身文への適性に関する一考察——「身体部位 N + 被 + N_a + VP」形式を中心に」『人文研究論叢』6号 星城大学

杉村博文 1984. 「処置と遭遇——“把”構文再攷」『中国語学』231号

杉村博文 1992. 「遭遇と達成——中国語被動文の感情的色彩」大河内康憲（編）『日本語と中国語の対照研究論文集（下）』くろしお出版

仁田義雄 1982. 「再帰動詞、再帰用法——Lexico-Syntaxの姿勢から」『日本語教育』47号

廣瀬幸生 1997. 「人を表すことばと照応」『指示と照応と否定』研究社

ウェスリー・M・ヤコブセン 1988. 「他動性とプロトタイプ論」『日本語学の新展開』くろしお出版

龚千炎 1980. 〈现代汉语里的受事主语句〉《中国语文》第5期

李临定 1986. 〈受事成分句类型比较〉《中国语文》第5期

吕文华 1987. 〈“被”字句和无标志被动句的变换关系〉《句型 and 动词》语言出版社

杉村博文 1998. 〈论现代汉语表“难事实现”的被动句〉《世界汉语教学》第4期

—— 2003. 〈从日语的角度看汉语被动句的特点〉《语言文字应用》第2期

—— 2006. 〈汉语的被动概念〉《汉语被动表述问题研究新拓展》第二辑 华东师范大学出版

张伯江 2000. 〈论“把”字句的句式语义〉《语言研究》第1期

Hopper, Paul J. and Sandra A. Thompson 1980. Transitivity in Grammar and Discourse, *Language* 56:251-299.